

「放射能汚染にどう向き合うか — 食の安全を求めて —」

健康には
ただちに
影響がない?!

私たちの食・健康はどうなるの?

医療放射線?
自然放射線??
海産物への影響は??

放射能汚染が各地へと拡がり、大勢の人々が不安を感じつつ暮らしています。

今、そして将来の私たちに対処すべき課題は・・・

放射能汚染の実態を明らかにし、安心・安全の道をとともに考えます。

講師

西村一郎氏 (日本科学者会議食糧問題研究委員会委員長)
「放射能汚染と私たちの健康・食は」

片山知史氏 (東北大学大学院教授)
「水産物の放射能汚染にどう向き合うか」

渡部朋幸氏 (福島医療生協わたり病院副院長)
「放射線と健康障害」

和田 武氏 (日本環境学会会長)
「脱原発、再生可能エネルギー社会へ」

日時：2011年11月26日(土)
午後1時30分～4時20分

場所：仙台市戦災復興記念館 記念ホール

入場無料 (講演資料・パンフレット¥300)、先着250名様

シンポジウム終了後、講師を囲んだ懇談会 (50名程度) を記念館内別室で行う予定です (午後5時～7時)



主催団体：

日本科学者会議宮城支部
日本科学者会議福島支部
東北大学職員組合
福島大学職員組合
原発問題住民運動宮城県連絡センター
原発問題住民運動福島県連絡センター
東日本大震災復旧・復興支援みやぎ県民センター
東日本大震災・原発事故被害の
救援・復興めざす福島県共同センター

問合せ先：

022-234-1335・高教組 (桜井)



講演内容

◎「放射能汚染と私たちの健康・食は」

西村一郎 氏

広島原爆の20倍以上という放射能汚染が各地へと拡がり、大勢の人々は家族や自らの健康と食で不安を感じつつ暮らしています。「ただちに健康への被害はありません」との発表がマスコミで流れ、中には「低濃度の放射線は健康に役立つ」とさえ公言してはばからない人もいます。医療や自然界からの放射線と比較し、この程度であれば心配なくいいと説明する「専門家」もいます。本当でしょうか。放射能汚染という社会病理の実態と、体外被曝と体内被曝の影響を前提とし、1)健康や食が脅かされている実態と評価、2)健康や食を守るためにできることを整理し、当面と将来の私たちが対処すべき課題について問題提起し一緒に考えます。

◎「水産物の放射能汚染にどう向き合うか」

片山知史 氏

海洋生物は、実に多種多様であり、またそれらの生活様式も様々である。しかし「東北の魚」が一括して敬遠されているのが実態である。ただし、その認識を「間違いだ」と断じることは難しい。漏出した放射性物質があまりに多量であること、海洋には流れがあり生物も移動することがその理由である。東北地方沿岸部において、漁業は基幹産業であり、地域の復興は漁業の再開にかかっているといえる。当日は、今後の海洋生物の放射能モニタリングの方向性を考察しながら議論を進めたい。

◎「放射線と健康障害」

渡部朋幸 氏

原発事故により放射性物質は全国に放出された。安心して地域で生活するためには、放射性物質を取り除く除染はもちろんのこと、放射線に対する正しい知識が最も重要であると考えられる。

講演では、主に4項目について述べる。まず、被曝による健康への影響について、最新の医学論文を紹介する。特に小児への影響について力点を置いて述べる。次に食品からの内部被曝に関して、チェルノブイリ周辺国の事例について述べる。またチェルノブイリ原子力発電所の事故に際して、住民の被曝を最小限にすることに成功したとして教科書に記載されているノルウェーの対策について紹介したい。

◎「脱原発、再生可能エネルギー社会へ」

和田 武 氏

まず、地球温暖化対策の重要性と地震国日本での原発依存の危険性、原子力推進政策の問題点を明らかにし、再生可能エネルギー普及の必要性を説く。次いで、再生可能エネルギーの特性を説明し、その特性を踏まえて、普及における住民など地域主体の参加の重要性を論じる。さらに、すでに再生可能エネルギー普及が進むドイツやデンマークの事例から、再生可能エネルギー普及が農村地域の活性化、産業の発展と雇用の拡大などの好影響をもたらすことを示す。最後に、日本での再生可能エネルギー普及の取り組みを紹介しつつ、今後の普及推進に向けた方策について考察する。